創刊100号記念
人物百面相……2面
三代の社会事業史(33)……〃
住民参加の自治組織……3面
民生委員四十周年記念大会……〃
家庭保育園の構想……4面
ことばのしおり〝大衆社会〟……〃

大阪の社會事業

発行所
大阪市社会福祉協議会
「大阪の社会事業編集室」
(大阪市北区中之島大阪市庁気付)
発行人　三井　正雄
編集人　矢内　正一
印刷所　大阪市福島区海老江上2丁目39　新聞印刷株式会社
毎月一回15日発行　定価10円　〒4円

秋を彩る赤い羽根

第十二年を迎えた共同募金運動は十月一日から全国一斉に展開。この日、中井大阪市長、栗井市会議長、杉共同募金会長、合田南区長など早朝から難波高島屋前で赤い羽根と募金箱をもってラッシュの人波に呼びかけた。本年度目標額は七千万円。ナベ底景気で青息吐息のこのごろ、生活困難者や失業者がふえる一方なので、赤い羽根運動に一そうの協力が望まれている。

西区靱地区では早くも目標額六万四千円を達成、突破第一号。

写真＝高島屋前で市民に呼びかける中井市長

協力と支援でよりよい新聞

三井　正雄

本紙は協議会の機関紙というだけでなく、市民に対しては社会連帯・協力について関心を求める傍社会事業家に対する全面的統一的な知識の浸透を企て、第一線従事者に対しては反省の具とし、研鑽の場とすることを目標としてきたのである。

しかし発行人として、この八年をふりかえってみて、道遠しの感にたえないのである。それにもかかわらず今日、本紙が百号を重ね得たのは、関係者はじめ読者各位の協力の寛容とによるものである。

創刊当時に比べると社会福祉事業も整備せられ、来年度には国民年金制度も実施されようとしている。しかし、年金制の実現をみることによって、貧困という問題はあるいは客観的には一応解消するとしても、社会福祉に関する問題は消滅しないのみならず、福祉に欠けることなき市民生活実現のためには、なお多くの努力を必要とするであろう。

このためには、さらに市民の協力、社会事業家の英知と技術とをますます必要とするものである。

こんど本紙もこの線に沿いながら、号を重ねて目標にひとしても近づけたいと念じているのである。

市民の生活と福祉に

大阪市民生局長　松本幸三郎

本紙が一〇〇号をむかえたことを、心からおよろこび致します。創刊以来八年の歳月が流れて、その間本紙が、戦後の大阪の社会事業の苦難と脱皮とそして向上への季節のうつりかわりを、いつも着実に報道し続けられたことに対して、市民の一人として敬意を表します。

私が民生局長になりましたのが、昨年の四月、つまり本紙が第八二号を出された月でしたから、私はまだ社会事業一年生です。そこでこの際月なみなあいさつをぬきにして、むしろ一読者としての立場から、つきに「大阪の社会事業」に対する意見や希望やらを述べたいとおもいます。

おそまき乍ら、私も創刊号からいままでのバック・ナンバーを一とおり読ませて頂きました。その結果、まず本紙がとくに児童・青少年と老人の福祉の問題点について、それぞれ時機に適した報道と解説をされてきた点に敬服しています。いつまでもなく、これら人生の両方の極端にある人々の生活の社会的保障の問題は、いまのわが国の社会保障に課せられた最大の宿題でもありますから、相当専門的な論説が掲載されるのは当然でもありましょうが、本紙が、ひとり公私の社会事業だけを対象とせずに、ひろくこれを、心からおよろこび致します。

創刊以来八年の歳月が流れて、その間本紙が、戦後の大阪の社会事業の苦難と脱皮とそして向上への季節のうつりかわりを、いつも着実に報道し続けられたことに対して、市民の一人として敬意を表します。

私が民生局長になりましたのが、昨年の四月、つまり本紙が第八二号を出された月でしたから、私はまだ社会事業一年生です。そこでこの際月なみなあいさつをぬきにして、むしろ一読者としての立場から、つきに「大阪の社会事業」に対する意見や希望やらを述べたいとおもいます。

おそまき乍ら、私も創刊号からいままでのバック・ナンバーを一とおり読ませて頂きました。その結果、まず本紙がとくに児童・青少年と老人の福祉の問題点について、それぞれ時機に適した報道と解説をされてきた点に敬服しています。いつまでもなく、これら人生の両方の極端にある人々の生活の社会的保障の問題は、いまのわが国の社会保障に課せられた最大の宿題でもありますから、相当専門的な論説が掲載されるのは当然でもありましょうが、本紙が、ひとり公私の社会事業だけを対象

の貧困者の問題は、ゆる層を読者とするならば、もっと解りやすく、くだいたナマの記事を報道されることが必要だと考えます。

また〝社会事業家の反省〟—第五号所載—のような記事は、やはり時々はのせてほしいものです。—社会事業家で社会事業を〝食い物〟にしている人々は多いようである…の豊崎博士の文章は、つねにわれわれ社会事業に従事する者の反省を新たにするものをもっているからです。

〝大阪の社会事業〟が単に告知版でなく、われわれが考えるべき当然の課題を、ありのままに提供してくれるであろうことを私は信じております。その意味では、舞台裏ちんやHBちん等は新聞としての立場から貴かれているものと考えます。

市民の生活と福祉のためにできるだけ明るいサービスを行うこと、そのためにも公私の社会事業従事者がいろんな垣根を越えて、わたかまりなく話し合い、お互いの責任をキレイに果すこと、これがわれわれの使命だと思います。

この使命が十分に果せるように、それ故にこそさきのような苦言をも呈して、この方向舵としての役割を「大阪の社会事業」にになって頂きたいとねがうのは、一読者としてのわたしだけでしょうか。

HB

社説は「岸首相に直言する」と題する朝日新聞としては近来にない強い調子の文章で、政治とは国民に向っての説得の努力である。と繰りかえし、これ以上の「戦前復帰」を好まないと断言している▼この論調は主幹の笠信太郎氏の執筆と思われるが、従来新聞の社説はむつかしいものと敬遠されてきたのだ▼併しこのような警世の文章をよむと、かつて中野正剛が戦時宰相論をかいて東条英機の忌避にふれ彼を自殺に追いやったあんな暗黒時代を再び招来しないためにも、万人必読の文だと思う▼同じ日の毎日新聞の市内版に府青少年保護条例審議会ではさきころ浪速区霞町二、温泉劇場＝責任者、和田直太郎さん＝に看板二種の撤去命令を出した。同劇場で興業中のショーの看板が青少年の悪影響を与えると判定されたものであると▼この記事の末には大阪通天閣ユースセンターきょう十七日から開館する、午前十時から市長や社協会長らが出席して開館式を行い、十八日から廿一日までの四日間開館記念のため講演会、府県対抗働く青少年卓球大会など五つの行事をくりひろげると紹介している▼同じ日の毎日新聞の夕刊では若人のオアシス通天閣下のユースセンター開所の見出しで、通天閣観光会社が地下一を市に提供、市青少年問題協議会が百六十六万円の工費で改造していたもの、とも書いている▼そしてこの通天閣観光会社の社長、役員の青少年問題に対する協力に対して、中井市長から感謝状が贈られたことは勿論である。事実こんな歓楽街の下真中にできたユースセンターは大阪がはじめてであるからである▼ご記憶のよい、本紙の読者は、今年の憲法記日に大阪府知事から社会福祉事業の功労者として表彰された名前のなかに、通天閣観光会社の社長の和田直太郎さんの名前があったことを知っていられるだろう▼さいきん府と市の民生行政の面でも、バカに対立意識が強くなって、民間の気の小さい者はハラハラしているが、ご両者一度通天閣の上にでも登って和田直太郎社長の清濁併せ呑む話でもきかれたらよい。(K・K・K)

百号記念特集 人物百面相

〝サロン〟に登場した人たち

（ひとロ） 百号というが、八年と四カ月である。月並みながら、もうそんなになるか―という感慨はまぬがれない。同時に、随分の人に会ったものだという気もする。もともと、人に会うことは、嫌いではなかった。というのも、このインタビューという商売、百人百様の未知の興味に触れることができるからで、これがなければ、この仕事、あるいは可愛ゆくなかったかもしれない。相手がわれと主かわらずときにはウンザリするような人物もあったが、なおかつ、いまだに人に会う楽しさだけは失わない。

◇

（人のウワさ） 誘者にとっても、興味深いものであるはずである。飲み屋で、大の男が、喜々としてしゃべっていることといえば、大がいは人の悪口か、イロ話である。また不思議にという、酒のサカナに一ばんひったりする。酒がうまいのである。『男の人って、女よりハゲシおまんな』と、あるおカミさんが述懐しているのを聞いたことがあるが、ナニ、悪口の好きなことに男女の区別はない。人物月旦のスタラぬゆえんであろう。

◇

（大ざっぱ） はにいって、サロンに登場していただいた人物は、二つの型にわけることができるようだ。一つは、歓迎する人であり、一つは、嫌がる人である。平凡だというなかれ、不思議にこの二つ、うまく書いてもらいたいという点では一致しているのだ。その同じ願望が、性格つまり内向性か外向性かという性格の違いだけで、まったく相反した反応を示すわけだ。心理学者ならば、たぶんこれだけで、きっと興味深い説明をしてくれることだろう。ぼくの記憶に誤りがなければ、淡々として会ってくれた人は、ほんの数えるほどであったと思う。

◇

（この稿） を担当したのは、五号目あたりからであった。その時、いまも編集者の一人である朝日の古閑慶之君、創刊当時の助言者であった毎日の松尾純雄さんなどから『もっと悪口を言ってよ。そしたら呼びものになるぜ』とハッパをかけられた。それなというわけで、インタビューはやらず、登場人物の周囲の人から、本人がきいたらカッとするような話ばかりを取材して書こうということで出発したのだからたまったものではない。完ぺきの人物なんていつの世にも存在するはずはないから、材料には事欠かない。ではまず誰をということになったが、古閑君が『松尾さんがいい。自分で憑ひ書けっていうんだから、大丈夫だ』という。そこで松尾さん登場となったわけだが、いま読みかえしてみると、この大先輩をつかまえて、実にどうも失礼の限りをつくしている。しかし、活字になってはじめて会ったときの松尾さんは、実にリッパなものであった。『あれでいいんだよ、キミ。あの調子でやりたまえ』と、まことにサラッとしたものだった。いいだし兵衛ということで、松尾さんは、実にリッパなものであった。『あれでいいんだよ、キミ。あの調子でやりたまえ』と、まことにサラッとしたものだった。いいだし兵衛ということで、松尾さんは、実にリッパなものであった。

◇

（ぼくの） 尊敬する人物の一人に、社大学長の四宮恭二さんがいるが、四宮さんはサロンを読んで、名誉キ損で訴えようか、などと側近に相談するほど、フンガイされたそうである。これはずっと後年になってからであるが、兵庫県下のある市で、社会事業施設の子を〝教育村八分〟にするというケースが起った。私の勤めている新聞社の通信部記者がつかんだニュースだが、その原稿がぼくのところに回ってきた。ニュースは論説ではないから、直接意見をまじえるわけにはかゆかない。そこはうまくしたもんだ、第三者の〝談話〟という便利な編集技術で、意見なるものを

フンガイした学長
茶化すのが筆者のクセ

ぶんに熟知していなければならない筈であって、これが個々のケースや地域全体のニードを察知し、庶民の代弁者となって四囲にすすめていくのである。

この辺に民生委員本来の面目がある。単に行政の補助に終らず、庶民の代弁者として、地域の指導者となって福祉活動をおしすすめていくところに民生委員の価値を見出したいのである。それは、四年にわたる林市蔵精神の現代化として、さらに伝承を続けていくのであることを信じる。

（さっそく） 若い記者に走ってもらうと、これがまた地元の人の社会事業に対する認識不足を爆砕して余りある好談話だった。心ひそかに感謝した次第であるが、ベストセラーになったというこの随筆集「先生といわれほどの」を読んでもわかるとおり、四宮さんは、ユーモアもあり、スジ金もあり、いわば機智と識見に富んだ学者である。そういう人をフンガイさせたのだからザンキにたえない。なにしろ八年前である。ぼくも若かった…。松尾さんといい、四宮さんといい、その他モロモロの人をふくめて、いくら〝妄言多謝〟しても足りないくらいである。

◇

（かと思） うと、多少ホメたつもりで書いたのに「ヒドイもっだ」と恨まれた人もある。田尻玄龍・水尾親、上田顕光さんなどは、この部類だ。いずれも個人的に親しくしていただいて、いわば、楽しみながら書いた人たちである。それがおのずから人物評にもにじんだわけであろう。ぼくには何事によらず茶化すクセがあって、いまには、明るく気楽に生きるという一種の生活技術にさえなっているのだが、それがいけなかった。田尻さんなどは、奥さんにまで「好かんタコやわ」と、冗談とも本気ともつかず、背中をドヤされたものである。

（私事を） 申して恐縮だが、ぼくは坊主だが、この世界は、あれでなかなか封建的なところがあって、兵隊の位のような階級があり、それで着るコロモの色までが違ってくる。位が上ったからといって収入が多くなるわけではなし、また人間の値打ちが出てくるわけでもないんだが、そこは世俗で、いろいろと運動をする俗物もかなりあるというしだいだ。ぼくはシリから二番目、まず一等兵というところである。これもどうやら学校を出ているからられたので、決して一等兵にも相当というわけのものではないが、それを気にして、放っといてくれたらいいのに、運動（ノ）をしてくれた親切な人がいた。―XYZ（続）―なお人物サロンは休載いたします。

民生委員制度の四十周年を迎えて

主張

林市蔵氏が四十年の昔方面委員制を考えついたとき、おそらく林知事は「方面委員は貧乏人を守り、ともにいければならない」という、自我を滅した純粋な気持をもっていたであろうことは想像にかたくない。その背骨があればこそ、四十年にわたって脈々として伝承されてきたのであろう。それゆえにまた民生委員が聖職として社会の尊敬を集めてきたことも確かである。

戦後、社会事業の在り方も変りそれに伴って民生委員の使命も大きく転換せざるを得なくなった。そしてそれが今日、民生委員制度を微妙な地点に立たしているといえるのである。「民生委員は貧乏人から浮きぬがっている」という批判も、そんなところから生れてくるのであろう。

しかし、この批判のいかんにかかわらず、民生委員制度はこんご方向に迷い、苦悩する。

なるほど戦前における方面委員は行政の補助機関としての役割を果していたことを思えば、古き時代への郷愁もまた止むを得ないけれども、協力機関である現在にまでそれを持ち込むことは時代逆行である。民生委員は、地域庶民の一人として自主的に「貧乏人をまもる」活動を続けるところに、民生委員の親しみもあり、尊さもあるのである。民生委員から庶民性がなくなれば、それはもはや民生委員でなくなるときだ。東京都の一民生委員は、こういっているのである。「自治体の議員が民生委員を兼ねていると、どうしても政党色がつくので、私は民生委員として公正な活動をするために議員をやめました。」

民生委員は地域庶民の一人として、

民生局、国際社会事業会議に新風

舞台裏

会議といえば、首脳部の頭数を揃えるのが従来のもっぱらの傾向だ。なぜ、多くても困るものが祝辞。それに祝辞に使われるコトバはむつかしいのが多い。誰でもにわかる〝話しコトバ〟で述べてもらいたいのである。とくに目立って難解なのは役所関係の祝辞―民主化はコトバから。

○…新聞週間の月に本紙も百号を出せることになったのも何かの因縁。この間、勝手なことを書いてお叱りを受けたこともあったが、幸い発行人の三井正雄氏の新聞をまもる理解からとなさを得たことも感謝の一つ。新聞週間の標語に因んで社会事業の新聞も言論の自由を尊重し〝話し合い〟の使命を果したい。

○…十一月開催の国際社会事業会議の出席者を大阪市民生局は、係長級の中堅職員としたことは近頃のヒット。こういう国際理解しただろうし、地域もどう援助するかを知っただろうから、来年度は出品が増えよう。これを機会に老人クラブ活動も軌道に乗るだろう。どこからみても大成功。

○…HB子は社会事業関係会議などで祝辞の多いことを歎いているが、この辺にも新生活運動を取り入れてほしいものだ。なくては困るし、多くても困るものだといえよう。

○…神戸市社協の音頭で五大市社会福祉施設連絡協議会が近く生れる。こういう傾向は歓行的な社会福祉事業法が発存する限り当然、まず実績を積み重ねてからモノ申すのが賢策、大いにやるべし。

○…出品の意欲を心配されていたホビー・ショウは、フタをあけてみたら出品を敬るという盛況ぶり。あれで老人もショウの意味を理解したろうし、地域もどう援助するかを知ったろうから、来年度は出品が増えよう。これを機会に老人クラブ活動も軌道に乗るだろう。どこからみても大成功。

○…HB子は社会事業関係会議などで祝辞の多いことを歎いているが、この辺にも新生活運動を取り入れてほしいものだ。なくては困るし、多くても困るものが祝辞。それに祝辞に使われるコトバはむつかしいのが多い。誰でもにわかる〝話しコトバ〟で述べてもらいたいのである。とくに目立って難解なのは役所関係の祝辞―民主化はコトバから。

強烈に打出すことができる。このときぼくの頭にすぐピンときたのは、四宮さんであった。

三代の社会事業史 (33)
―小橋かつえ刀自聞書―

松浦進三　金田広一　画

教会の再建

夫君、実之助氏の死後、博愛社長をついだ小橋さんは、周囲と相談したうえで、それまで「社団法人」だった博愛社を「財団法人」にきりかえた。昭和一年の四月である。いらい、社の運営は、社長である小橋さんと理事教氏によって、戦中、戦後とおしなべて大阪の社会事業を襲った苛酷な波の数々から免れることなく、運ばれていったのである。

建物を増やし、あるいに紛失したものを再建することは、今昔を問わず、経営者の宿命のようなものである。資金のないのは始めから分りきったことであるし、いわば無から有を生ずるようなもので、その苦労はなみ大抵のものではない。社会事業家は、収容児をいっぱいに育て、更生させるのが真の使命なのだが、建物を建て、ふやし、外観を素晴しくすれば〝ヤリ手〟だといわれ、〝事業家〟だといわれる。国が社会保障をやらず民間にまかせっぱなしの、日本の社会事業の悲しむべき伝統というべきであろうか。

ともあれ、現実がそうなのだから、致しかたがないといわなければなるまい。つまり、社会事業家にとっては、余分な苦労なのである。昭和九年の室戸台風で、社の精神的な面の中心である教会を倒され、それを再建した小橋さんの経験話から、その苦労を、記録しておくことにしよう。

これよりさき、故実之助氏の徳を慕う、社の出身児の拠金によって、その銅像が出来上ったのが、昭和九年六月一日であった。彫刻家江川治氏の労作であるが、その晴れの除幕式があって約四カ月後の九月二十一日あさ、室戸台風は、大阪を中心とする近畿一帯を襲ったのである。

瞬間風速六十㍍―これは大阪管区気象台はじまっていらいの、空前の記録であって、その後本土を襲ったもので、この間の二号台風もふくめて、これをしのぐものはないといわれるほど、大きいものであった。大阪市の死亡及び行方不明者九九〇人、重傷者六、九〇八人、家屋全壊八二一戸流失三一五戸、半壊三、〇四五戸浸水は全市面積の約三割、浸水家屋一三、八、六六四戸、船の沈没七九七隻―という被害記録をみるとき、その規模が分ろう。当時、筆者は小学生であったが、学校の窓から眺めた大阪の空は、カワラやトタン、板ベいなどが、風に舞って、古新聞のようにちぎれ飛び埋まるといったセイサンな光景を、いまでも覚えている。さほどひどかったのだ。

このとき、社会事業施設では、水上隣保館が流失している。木造だった博愛社の教会も、倒れた。幸い児童には死者人はなかったが、小橋さんはすぐさまその再建にのりだした。それも鉄筋でやろうというのである。

「とにかく、さきの関東の震災といい、台風といい、天災国日本では、どんな大火、大震、大風がいつ何時やってくるかわからない。そんなとき、安全地帯としての、頑丈な建物がほしい。それには鉄筋にかきる。児童たちの命を守るためにも、必要だと思ったわけでした……」

しかし金はさきにもいった通り、ほとんど一文もない。常務理事である林歌子さんと、名出保太郎さんに相談したが、〝金もないのに鉄筋なんてもってのほか〟といった調子。しかしこたいいだしたら後へはひかない小橋さんだ。女ながら、事業家としての小橋さんの面目を物語る奔走が始まる。

「社会課へ行ってある人に相談したら、東京の原積善館に行きなさいと教えてくれた。さっそく行って申請すると、六千円を寄付してくれた。東京では、聖公会関係の人から、京都にウイリヤムス監督の記念費で残っているのがあるというのと、大阪府庁に、全国から集った見舞金を、家屋の壊れたものに限り交付してくれるからと、教わりました。で、ウイリヤムス記念費から六千七百円、府庁からは会計課に日参して、これは一万円ほどの交付をろうました。それに博愛社のお金三千六百円を加えて、さっと二万六千円。設計は、アメリカ人で、〝大丸百貨店〟を設計した一柳ボーリスさんでいたのですが、この人は、建築家で伝道者で、また教育者であり、メンソレータムの兄弟会社の経営者でもある帰化人ですが、予算は約四万円かかるんですから、とても足りない。それで名出さんに頼んで、―名出さんもはじめは反対でしたが、もうそのころは半ばアキラメた形。さっそく全国の教会から四千円の義金を集めて下すった。それに皇室からのお見舞金千円、三井報恩会から三千円。もちろんまだ足りない。ですが窮すれば通じるもので、アメリカの聖公会本部へ頼んだら……と教えてくれる人があったので、手繰きをすると二千ドル、当時の為替勘定で三千円が届きました。それに有志の寄付を加えて、ようやく四万円ができた―。どこからそこへ、府庁と三井報恩会から寄付があった。つまり教会の再建は宗教活動であって社会事業ではないから、皇室のお見舞金と報恩会の資金を教会の再建費用に使ってはならんというわけです。そこで私は一策を案じた。『礼拝だけには使わない。隣保館をつける』といってやって、交渉数回、やっとまとまったような次第でした。一方、ボーリスさんも『礼拝だけなんてセマイ考えはいけない、地区の福祉と、社会事業の使命を徹底させ建物にするのだ』と不幸成で、設計もはじめからそのようになっていたのでした」

この間、さっと一年と八カ月。いま博愛社の正面入口のすぐ南側に建つ教会は、小橋さんが心血をそそいだより人を真に活かすための建物となって、十一年五月十七日に建坪七十九坪、二階建の姿を現わしたのである。

このような苦心は、小橋さんに限らず、あるゆる社会事業家が、大なり小なり経験してきた苦心であり、接渉であり、事業であったのだ。これはその、象徴的な物語の一つであるにすぎない。（以下次号）

住民参加の自治組織

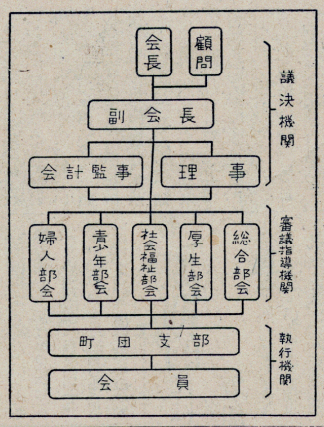
高見連合自治協議会の動き

地域内円満第一主義

旧町会とはつきり一線

校下社協の運営は、どこでも頭痛の種。市内全校下数の九十五パーセント以上に校下社協が組織され、住民参加によって福祉に欠けた状態を克服し明るい町づくり、明るい生活を進めようとしているのである。

区社協では会長を中心にその効率的な組織と運営について衆知と努力を構している。しかし区内の実情判断を誤ると、かえって混乱が生じるという微妙な関係もあるらしく、区社協の悩みも、案外この辺にあるようだ。これは、日本の社協が"上からの組織"だったことにその遠因があるわけ。全国が同じ悩みを悩んでいるものこのため。



此花区社協は、この問題を市民組織の上に乗せ、住民の協力参加の態勢をとっている。高見連合自治協議会がそれである。まず性格からみていこう。

自発的な組織化

自治の向上と福祉の増進というが基本的なネライで昭和三十二年六月に発足、そのため"各種団体の代表者並びに重要なる役職にある者"が参加協議一地域内円満第一主義"で「全住民の総意を結集して「部内の環境に応じた施策を充実し福祉事業の完遂と自治の向上」を進めようというのである。

ちょっとみると、戦争中の町会と紛きれやすいが、同協議会規約で次のようにハッキリとケジメをつけている。

「高見（校下内）住民が社会生存の意義を体得し自ら喜びの生活に浸る努力はもちろん、その喜びを全住民に及ぼすことを最高使命として地域社会福祉事業の能率的運営と自治振興を図るを目的（第三条）」と謳い上げていることからでもわかるように、地域組織化事業としての性格をもっている。しかもこの組織は校下住民の自発的組織化されて"能率的運営"が期待できるのである。

鼎立による安定度

この協議会の事業を規約（第四条）から要約すると、部内一各種団体の行う事業の連絡調整と助成」、ここで参加各団体の活動が組織化されて"能率的運営"が期待できるのである。

赤十字、共同募金、青少年補導、老人福祉、民委活動、保健衛生、小中学校幼稚園保育所やPTAの協力などのほか、自治向上に必要なる調査研究と指導というように、おとそ市民生活を取りまく"要素"が事業の対象になっている。

こうした協議会の活動の組織は上の図表で理解していただきたい。

この部会員は各町から選ばれた十二名が当る。

毎月十五日には定例理事会をひらく。これは区民生委員協議会、区社協会議、赤十字奉仕団、婦人会などの区単位の全体会議にそれぞれの担当部門で出席したこの自治協議会の会長あるいは副会長、理事が中心となって協議し、議審して活動の組織化をはかるのである。自治会から要請があれば区所からも学校、各団体からも出席する。翌十六日または二、三日の内に町団支部会議を開いて理事会決定事項を周知、協力を求めるという仕組みである。

一見、戦時町会を思わせられるような組織だが、上意下達という一方的な押しつけでなく、理事会や町団支部会議で、ハネるものはハネて、そこが同時に下意上達の場となっている。この相否があると、たとえ区の仕事でも立往生するわけ。"上から下へ、下から上へ"と話し合う場が定例会議で、

決定事項の協力を

ここで協力体勢が整い、自分のものとして受け入れることができるから、無理が生じない。円滑に問題解決へ進むことができる。

坂谷孝太郎 全くの自治組織で社協会長談 社協としては感謝している。役所のいうことであれば何んでも呑むというのでなく、

橋口此花 赴任早々、町の有力者の世話で役所の仕事はタテの繋りはよいが、ヨコの連絡は全くテンデバラバラ。社協日赤、民生、防犯の仕事などを社協を中心に放射線的に動かす方法

区長の話 調整するという協議会の基本的理念とその構成を知り、同時にタテの関係においても社協を、奉仕団をたがいに理解し、協力を寄せることとなって"校下内の公私機関、団体が協力する態勢を促進する。

このため左の部会制を設けている。

▽総合部会（他の部会に属しない事項）
▽厚生部会（体育衛生関係）
▽社会福祉部会（福祉三法その他社会福祉一般）
▽青少年部会（青少年対策企画や児童福祉一般）
▽婦人部会（婦人の生活教育趣味の向上）

民生委員制度四十周年記念民委大会

一二千余名参加、盛大に挙行

民生委員制度四十周年を記念して十月七日午後一時から中央公会堂で大阪市民生、児童委員大会が開かれた。

駒井常務、麻島常務がそれぞれ民生委員信条、児童憲章朗読で、式が始まり、ついで中井市長の式辞、松本民生局長の民生事業現況報告、広瀬民連副会長の民連事業経過報告があって、別項のとおり福島区民生常務田中治一郎氏ら百三人の永年勤続民生委員と二人の更生者が、中井市長から表彰された。とくに林記念賞を贈られた村田朋次氏が不自由な身を家族に支えられて出席されていたのは人目をひいた。

このほか区福祉事務所の職員三十二人に対し民連会長は感謝状をおくった。

第二部（討論会）として"四十周年を迎えて委員活動は如何にあるべきか"について生野常務北野吉之助氏の司会で、大阪女子大学長平林治徳、関学大教授今田恵大阪YWCA青年会長河野貞秀、西淀川区常務池水辰次郎、東住吉区常務南利三の各氏が討論した。

なお開会にさきだち市長はつぬ各区常務は揃って淀屋橋河畔にある創始者林市蔵氏記念像に献花を行い、遺徳をしのんだ。

遺徳しのんで 献花

広瀬氏ら135名受彰

別項＝民生委員制度四十周年記念第十二回大阪市民生児童委員大会において永年勤続民生委員、特別功労、民生事業協力者を表彰した。（カッコ内は勤続年数）

正副常務委員

池田万助氏＝東区（二〇・七）▽広瀬栖治氏＝浪速区（二一・七）▽池水辰次郎氏＝西淀川区（二〇・二）▽麻島釜雄氏＝東淀川区（二〇・七）▽北野吉之助氏＝生野区（二一・一〇）▽駒井信義氏＝城東区（二〇・六）▽藤井敬氏＝住吉区（二一・三）以上常務

田中治一郎氏＝福島区（二〇・六）▽黒川知博氏＝北区（二〇・六）▽江口三法氏＝港区（二一・六）▽羽賀一郎氏＝天王寺区（二一・一一）▽橋本庄治郎氏＝大淀区（二〇・一〇）以上常務、副常務期間

▽三浦源太郎氏＝大正区（二〇・六）▽井上秀之助氏＝西淀川区（二一・一）▽大東三郎氏＝生野区（二〇・一）以上副常務

特別功労者

吉富繁太郎氏＝旭区常務

林記念賞

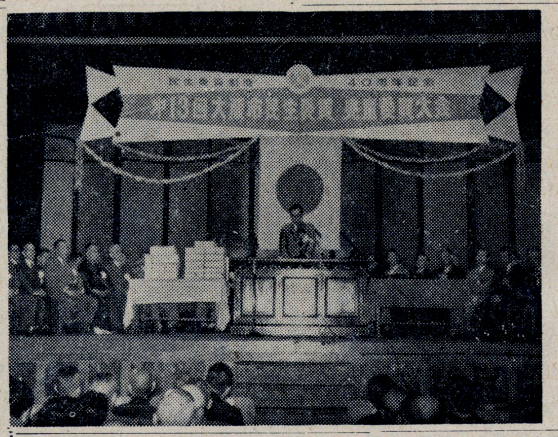
林市蔵氏記念賞は村田朋次氏（都島）、吉富繁之（西成）の両名誉常務が受賞。

民生事業協助者

奥村安太郎氏＝港区、石材販売業＝被保護世帯のため昭和二十六年以来、毎年金品を寄贈するほか市立八幡屋保育所建設に私財を投じた。

内藤銑太郎氏＝南久高津宮宮司＝陰の人として民生事業に協力を続け、歳末には餅一石を寄贈している。

このほか、更生者小池益美（北）高橋千代能（東住吉）さんの荒波と戦った二人のお母さんも表彰された。



伸びる老人ホ

ビー・ショウ

松尾純雄

アメリ カ伝来の老人ホビー・ショウは実施のフィールドが多方面あり、従ってその意味もひとつかわれているらしい。が、日本の客観状勢はいっぺんに何ともかもやるわけにゆかない。ホビー・ショウは「余技展」もふくむが、これだけに限られるものでないことを、おことわりして、さて、大阪市で、はじめて統一的に開催された同催しをふりかえって見ることにしよう。

老人を単にいたわり、なぐさめるだけの「敬老」思想は、これだけではやがて壁にぶっかってしまう、老人といえども、老人になさわしく、社会に有意義な働きがけをし、積極的に余生を楽しむと同時に、発展的な敬老思想を高める、という趣旨から、ホビー・ショウは着手された。主催は大阪市老人クラブ連合会、大阪市社協、毎日新聞大阪社会事業団、それに大阪市が後援して、九月二十七、八両日、場所は大阪市心斎橋大丸七階水曜クラブ室。

まず心 配だったのは出品数で、少いだろうの予想が完全にうらはらになって、三百点の予定が四百五十点以上になり、一人で二十点も出品したものは、半数遠慮して形なさを一点一点に考えたら優に数百点にのぼっただろう。陳列が余りにつまり、重なりすぎて、係員と観客がけんけんごうごう、うれしいやら、困るやら。次の場合は、一人あての出品点数を制限するか、会場を大きくするか、再考の要があろう。会の性質上、出品者はいずれも厳選して、多くの出品者を除外することは、絶対できないことだろうから。

次は質 の問題。ホビー・ショウ＝余技展の感覚は、原則的にはアマチュア的出品ということになる。ところが、出品者はいずれも六十才以上なのだから、過去の職業、経験とも豊富なヴェテランである。本職には直接関係ないというものの、実際には間接的に大いにつながりがあるもの。例えば、かつてはれっきとした高級大工職であった人が、優れた芸術的木工品になって、そう取り立てることもなかったのであるが、金賞十名、銀賞二十名を選び出す段になって、審査員の判定標準が難航し、結局、表彰はアマチュアリズムを中心として採択することにした。しかし、純粋にアマチュア作品であるが、長い年数をかけて丹精した上の、余りに優秀な作品であったため、かえってプロなみに扱われ、表彰もれになった作品もあっただろうことはいかにも残念で、申訳ないことになる。表彰さえなければ、そうした矛盾もなく、すっと楽な気持で、いい意味でもアマ、プロを問わず、老人の傑作が拝めるまで、望ましいのだから、この点も再検討しなければならない。

もう一 つ、出品物を即売して、当人の収入にすることにしたのだが、これは希望数や件数からいっても、失敗のようだった。各出品者がもっと意欲的であってもいいと思うのだが、これも今後に残された問題である。

最後に 初めての試みだっただけに P・Rと事務の期間が短かすぎた。事業の性質上、どうしても三カ月、理想的には半年の準備期間を必要とするだろう。結論として、老人のホビー・ショウは、大阪に関するかぎり、もっと伸びることが、はっきりわかり、楽しいものであった。（筆者＝毎日新聞大阪社会事業団理事）

京阪神の福祉

本号は自身記念だそうだから京阪神の福祉をワクを拡げて日本の福祉にふれてみよう。というのは、度関西学院大学で過日第六回日本社会福祉学会が開かれ、全国、北は北海道から南は沖縄まで一もっとも沖縄は偶然こちらに来ていた人が参加したのだが一学者先生が約二百人集って日本の福祉について発表会からシンポジュウムをお開きになった。

しかし一番印象のあったのはやはり協力できること、できないことを見きわめて住民が決定するのだから、決った以上は皆が協力して進む。皿の通った校下社協組織というのだろう。これを各校下一律にもっていこうとは思わぬ。それぞれの校下の実情に合った組織が考えられなければ、血を通わすことは出来ない。

橋口此花 赴任早々、町の有力者の世話で役所の仕事はタテの繋りはよいが、ヨコの連絡は全くテンデバラバラ。社協日赤、民生、防犯の仕事などを社協を中心に放射線的に動かす方法を区長に期待するといわれた。お説ごもっともで、どうしても戦時中の町会組織が思われてならなかった。いろいろと考えてみたが、多くの隘路のあることもわかり、中にも指導者の役職の振分けのこともその一つだった。

偶々高見地区で住民会参加という自治組織が生れ、私が構想しているの小地域社協とやや趣が異ったが、その目的は果しているように思われる。区としても自治会の発展過程に関心を払いつつ健全に育てるようにしたい。なおこんど此花全地区に普及したいとも思う。

これは 表彰規定がなかったら、そうなるのだ。

家族の分裂を示すものであると。基準の決定の非民主的、非現実的といったような法自身のもつ悪い面とその運営についての法の解釈の不適当性との両面が論ぜられ、まさに日本の福祉の一番の欠点を採上げたものだった。

ただこれらの結論がどの様に今後の政治に反影されるか、学会だから当然学問だけということでなく、その会場でも行われていた警職法反対署名運動のように正しい方向を政治に反影してもらいたい。一人でも多くの家族の福祉のために。

職業的タッチだったりするものは、余技展ではどうかということになる。

を出陳したり、どう見ても作品が

こと、四十年にわたって脈々として伝承されてきたのであろう。そ

るのである。「人から浮きっぱなしっている」という「もる」活動を続けるとこ

乳幼児（三歳以下）保育の方向

誕生する家庭保育園

その構想と各界の反応

乳児および低年齢（三歳未満）児童の保育についての社会の要望は数年前労組婦人部が働く婦人の乳児保育を真剣にとりあげて以来大きな社会問題として表面化して来た。乳児を抱えた婦人労働者が、働かねば食えぬという事実、あるいはまた、働くことに自己の社会的使命を見出している婦人たちの存在、これらの現実の姿が、"子供は家庭において、母親に育てられるべきだ"という理念を超えて乳児保育の実現を強く要求するのは当然のことである。大阪市はこうした社会的要望に応え家庭保育園の構想を打出し、実現体制を進めている。働らく婦人の乳児を一般家庭に預けて保育するという古い託児の形に衣をきせて、近代的な姿に生れ変らせ、制度化そうというのである。

保育所はニードを充すことが出来ぬか

大阪市の、この構想の背後には、既存の保育所に対する根強い不信がある、と保育所側は考えているようだ。児童福祉法によれば、保育所は保育に欠ける乳児および幼児を保育する所とされている、にも拘らず乳児は勿論、三歳未満の幼児で実際に保育所に措置されている児童は誠に少ないのが現状（公私保育所一三〇カ所、措置児総数六、四五八名、内三歳未満児三〇四名で五%弱＝三年三月現在）その理由はどこにあるかを考えてみよう。

（イ）低年齢児の保育は、保育てのものが極めて困難であること

（ロ）設備、保育者、経費の面で困難があること

（八）三歳以上の幼児のみで十分定員をみたし得たこと

（二）従って保育所長も保母も低年齢児保育について全々といってもよい程関心をもたなかったこと

これらの理由がからみ合って、保育所側でも、また社会の側でも「保育所という所は乳児や低年齢児を預かる所ではない」という観念が何時の間にかでき上っていたのではないかと考えられる。保育所の幼稚園化が云々されるのもこういう所に原因しているのではあるまいか。

保育所の窓口に乳児や低年齢児を預ってもらいたいといって来る母親がポツポツ現われ始め世論が沸いてきて、良識ある経営者が乳児保育の必要を認識しはじめた現在でも、前記の困難性の大部分が克服されないかぎり、にわかに踏切ることができない。三歳未満児がわずか五%弱、〇歳の乳児はたった二人という数字がはっきりこの事実を示している。措置費（保育単価）が低すぎる、乳児保育のための設備変更の経費がない、という理由が保育所から叫ばれるが、それは真実でもあり、またできるかぎり乳児保育をやりたくない人たちの口実でもある。しかし五%にせよ三歳未満児が保育されておりそれが伸びる傾向があるということは、頭の切り換えさえ如何では不可能事ではないことをも意味していよう。この望ましい傾向に拍車をかけ、低年齢児保育に伴う危険性の増大を避けること、これは児童福祉行政機関の当然の責任だなければならぬ。子供は家庭で、という理念を金科玉条として合理的な保育所制度をまもろうとせず、「家庭に代るもの」として他人の家庭に預ける方法のみに固執することは必ずしも最善の方法ではない。家庭保育園の構想は保育所の配置の状況や、その人的物的状況がいまにわかに社会のニードを充たすことが出来ないという現状を補ってゆくもの、いわば一時的、ぴょう策である。その意味で乳児の福祉という立場から止むを得ない方法として賛成。というのが民間保育所の人々の討議を重ねた上での結論である。

さらに保育所の代表者は、少くとも〇歳の乳児は、完備した乳幼児院に収容するか、収入のある婦人ならば一カ年位借金をして家政婦や他人の人に来てもらって自分の家庭で保育するのが、子供を産んだ母親の使命であり、真に子供の将来の幸福を思うものだ、と保育専門家としての意見をつけ加えている。

また未亡人会では、一歳未満の離乳期前の子供を預かることは、保育所の増設、乳児保育への切換促進と併行して進めていくのが良いと思われる。乳児保育は保育所の集団保育でも可能といえよう。いまの保育所では不可能だから家庭に預けるという考えが民生局にあるのではないか。赤ちゃんを預けることが好ましくないとか、医学的にも問題はあるだろうが、預けなければ食ってゆけないという生活の現実があることも知ってほしい。

婦人少年室や労組婦人部は、かつての運動からいまはむしろ既設の保育所を理解し信頼する立場に立っていることがこれらの希望からようかがわれるのである。

バルナバ病院の吉矢博士は、医者として、また乳幼児問題の専門家の立場から、子供を育てた経験のない家庭は危険だ。病気の面からみても、個人保育では困難な問題が多く、母親の負担する費用も割高となり、預かる側でも結局足が出るのが常識だろう。個人の家庭の善意にまかせておくことは極めて危険だ。責任の重大さを十分に認識、対策を講じ、その上で気楽にやれるようにもってゆくことが大切だ。家庭保育園の制度を実施されるにあたっては、民生局に保健婦のパテランをおいて巡回指導を実施し、併せて受託者を登録させるのが良いのではないか。特に加えたいことは、乳児は死亡率が高いから、生後二カ月位では乳児院が理想的で、保育所や家庭保育園へ往復することさえ危い。保育所も家庭保育も医学的には便宜的なものと言わねばならないと警告。

働く婦人 乳幼児保育研究集会

職域女性共通の悩み解消へ

働く婦人の三十パーセントが既婚者であることは、育児のうえに深刻な問題を投げかけているので本協議会は大阪婦人少年室と共催朝日新聞厚生文化事業団の後援を得て九月十八日午後一時半から、朝日新聞社会議室で、働く女性共通の悩み解消をめざして"働く婦人の乳幼児保育の具体策"について研究集会を開らいた。内容は別記の通り。

労組関係　大阪地評婦人部長井口容子、大教組婦人部長小笠原政子、市職青年婦人部長紀井浩、市役婦人対策執行委笠川昭三

婦人団体　市婦人団体協議会長松葉静子、市未亡人連合会長大林志栄

保育所　市社協保育分科会長三木達子、私立保育連盟副会長小川秀一

学識者　市大教授岡村重夫、バルナバ病院小児科長吉矢久一、朝日新聞厚生文化事業団社会事業部長賀集一

民生局　局長松本幸三郎、次長池川清、児童課長西田誠行

原則的には保育所で

労組婦人部の声

労組側では地域の家庭で子供を預ってもらうという考え方で従来運動を進めて来た。婦人少年室が中心となって婦人労働者の強い要望にこたえるために保育を希望する側と、預りたい側の調査を実施した。その結果「預けたい」側約三〇〇名に対し、「預かりたい側」は五、六十名で非常に少く、しかもこの両者の結びつきが極めて困難、僅か六組だけしか結びつけることができなかった。この運動の進め方についてもいろいろ問題はあったと思うが、他人の乳幼児を家庭で預かる、預けるということになると職場と預ける場所という地理的な条件以外にも、その家庭の環境条件、設備、預かる家族の人格、知人でなければならぬとか……、人間を預け預かる以上種々複雑な問題がある。この運動の結果として現存労組婦人部は保育所で集団保育をしてもらうことが原則的な方法だと考えている。公私立の保育所で〇歳上三歳児の保育を大巾にやってもらいたい希望をもっている。

ある婦人職員は赤ちゃんを背負って出勤し、小使室に寝かせ、同僚が代りあって面倒をみている実例がある。そうしなければ彼女は生活を立てることができない。この現実を具体的に解決しなければならない。産後六週間の休暇明けから乳児を預る施設が必要。しかしこの家庭保育園の構想は、保育所の増設、乳児保育への切換促進と併行して進めていくのが良いと思われる。乳児保育は保育所の集団保育でも可能といえよう。いまの保育所では不可能だから家庭に預けるという考えが民生局にあるのではないか。赤ちゃんを預けることが好ましくないとか、医学的にも問題はあるだろうが、預けなければ食ってゆけないという生活の現実があることも知ってほしい。

婦人少年室や労組婦人部は、かつての運動からいまはむしろ既設の保育所を理解し信頼する立場に立っていることがこれらの希望からようかがわれるのである。

家庭保育は伸びる？

市大柴田助教授は、家庭で子供を預ってくれる家は事実として相当あるし、預かる人によっては育児の効果をあげることもできる。しかしこれを一つの制度として推しすすめていくことになると、日本の閉鎖的な家族制度の問題がからんでくる。見ず知らずの他人の子供を自分の家庭の中へ受け入れることに本質的な困難があるのではないか。養子目的の里子、デッチ小僧としてならば家庭に入れても、単なる個人として家族の一員に加えることが日本の社会の一つの制度として可能かどうか、という疑問を提出されている。

保育と社会福祉制度

乳幼児の保育という社会的ニードに直面して、大阪市が民生行政の機構を拡大してその実現に邁進していることは喜ぶべきことである。まだその実現の過程として、保育所の意見を聞き、労組、婦人団体や識者に伺うという民主的態度を示したことに敬意を払うものである。

残された問題は、乳児をかかえる母親が働かねば生活ゆけないという社会、この社会における社会福祉の制度が、母親が働かないで乳児の保育に専念できるように生活を保障し援助する方向に向いていないで、絶えずぴょう的に、子供を不完全な預り方で保護しながら労働を強制するという方向にのみ向っているということである。

理事決まる

大阪市民援護事業団

大阪市民援護事業団では、このほど理事会を開催、任期満了による理事監事の改選を行った。改選の結果、鈴木栄一氏（大阪市民共済会長）、賀集一氏（朝日新聞大阪厚生文化事業団理事）が新しく理事に選ばれたほか、坂間棟治、松本幸三郎、北野吉之助、岡村重夫、三井正雄の各氏は理事、北原良雄氏は監事に再選された。

ことばのしおり

大衆社会　Mass Society

大衆社会という言葉がつかわれている。ことにマス・コミュニケーションの発達は、これを促進せしめた。即ちマス・コミの発達は大衆を階級、性別、年齢、教育程度、職業などのワクを破って、同じ送り内容をいっせいに与えることにより、受け手としての考え方、感じ方、態度などを均一化していく。たとえばテレビの娯楽番組は子供から大人まで男女を通じて、どのような人にでも同じ番組を見せ、聞かせるから、受け手である大衆は均一化し、階級社会の土台のうえに、見せかけの超階級的な大衆社会が生れるのである。大宅壮一が唱えだした"一億総白痴化"などは、その過程を端的に言いあらわしたもの。

いうまでもなく大衆は、現代社会においてマンモス的な存在となり、しかもそれを無視することができなくなったのは、大衆が現在営んでいるいくつかの機能およびその影響が現代社会との関連において放置できないからである。

大衆社会は、人間の非情化を進める一自己疎外されつつある現代人の行動をみればおのずと明らかにされるだろう。組織化と合理化を叫びながら、いっぽうではビジネスにおける単純責任負担という労働に従事することから当然、自己喪失感が起り、その虚脱ゆえに大衆化へと促進されていくのである。

しかし、この大衆社会を規定するものには、たとえ基本的イデオロギーの差異があっても、大衆民主主義社会であるといってもよい。このことは、大衆の政治関与の機会を、ますます増大さしているといえよう。

大衆化を進める条件の一つにマス・コミュニケーションの役割をあげることができる。即ちマス・コミと大衆文化（Mas Culture）を中心として、その発展と成立とが、大衆社会形成にきわめて強力な要素に形づくっているのである。世論形成のためのマス・コミが娯楽的、消費的内容をもつに至ったことは冒頭に書いたとおり。

しかもマス・コミが商業性と企業性をもたなければ自滅するというみずからの運命を拓りひらいていくいっぽう、繁栄政策や政治的不安定社会に生きる人人の消費文化への欲求充足のために大衆化の条件は出揃っているわけ。従って大衆文化が消費文化への欲求と、その変質であるといわれるゆえん。

このように大衆社会は、一方では組織化であり、他方では個人の孤立化であって、そのさ迷える民衆が均一化される環境と自己との間のバランスを回復しようとするメカニズムが大衆社会の生れる基盤なのである。

いま生れている サークル活動、朝日新聞の"ひととき"グループ、"明星"、"平凡"のサークルなどのほか学校や職場や地域に学習、娯楽、音楽、社交、生活扶助におよぶ各種のサークルがある。（や）

老人お楽しみ会

北市民館が共催

北市民館では老人福祉月間行事の一つとして区内の三つの老人クラブ（鶴青会・白鷺クラブ・共楽会）と同館との共催で九月十九日午後一時から「老人クラブお楽しみ大会」を開催。老人クラブの素人演芸会もありなごやかな一日を過した。

暴排へ統一行動を

府警

市民団体と話合い

大阪府警では昭和三十一年以来暴力排除を進めているが、こんどいっそう強化し、市民生活を不快にするような些細な暴力でも許さぬという強固な態度を決定。九月十八日午前十時から警察クラブで国鉄、私鉄関係者、府市社協、青少年問題協議会、婦人団体、少年補導協会、防犯連合会、赤十字奉仕団等の関係者と、十月から始まる暴排運動に協力するよう日向府警防犯部長から要請があった。

①暴力を憎む気風の醸成

②無法者に対する市民の抵抗体制の確立

を中心に市民団体の立ち上りによって暴力排除、"明るい町平和な町"を建設しようという。

社会福祉施設連絡協議会

五大市

十一月七日、神戸市で

五大市では社会福祉協議会連絡会議をもつ傍、最近ではそれぞれ部会においても連絡協議会が結成されつつある。神戸市社協が主唱し来る十一月七、八日、神戸市で五大市社会福祉施設連絡協議会を設置することとなった。

この施設連絡協議会の構想は各業種別とせず「生活保護施設」「児童福祉施設」の二部会として発足する。

各区会長会議

更生資金配分など協議

大阪市社会福祉協議会各区会長会は十月三日午前、今橋クラブで開催した。協議題は次の通り。

▽世帯更生資金貸付金第二次追加配分について

▽冠婚葬祭の簡素化運動の推進について

▽暴力排除運動協力について

▽里親月間運動実施について

▽第八回社会福祉事業近畿地方研究発表会の開催について

防犯灯設置協議

西成区役所で開催

西成区東田町に防犯灯を設置しようという動きが各団体の間で盛上ってきたので、これが対策協議会を九月三十日午後、西成区役所で開催する。